

自由な暮らし方や楽しみ方を、 ここで見つけてほしい

岩田みどりさん◆NPO法人たすけあいつばさ理事



「この家は、夫の大叔母とほぼ同じ年だそう
です。生前娘の初節句の席で、『建てた翌年
に私は産まれたのよ』って話していました。」
お宮参りや初正月・初節句などの度に、大き
な座卓を幾つも並べて親戚が一同に会してい
たという広い日本家屋は、築118年にもな
るのだと、貸主の岩田みどりさんは話してく
れた。

絹織物が盛んだった時代には機屋を営み、
織り子さん達が住み込みで働いた。住居難
だった高度経済成長期には2階を3つに仕
切り数組の若夫婦に貸してもいた。この家で
生まれ育った夫・康明さんによれば「新嫁さ
ん達に赤ちゃんが生まれると、父は毎日『沐
浴係』を引き受けていました。恐い親父でし
たが、なぜか乳児をあやして洗うのがすく
上手で、横須賀育ちでハイカラだったから、
2階をダンス教室にしていたこともあったな
あ」。

この家は、時代に合わせてさまざまな人の
生活の入れ物となってきた。

「嫁いできたときはまだ、広い土間も、ガラ
ガラ響く木の引き戸も現役。冬は寒かったけ
ど、その古い風情が私は好きでした」。住ま
なくなっても、岩田さんは家が傷まない
ように毎日風を通していった。「でも、人がい
ないと空気が動かないんですね。この広い空
間を求めている人がいるのでは…？思いは募
り、移住サポートセンターを通して借主を探
していただきました」。

壁の漆喰や、大きな梁を生かした改装を行
い、現在こは「やしきぼっこ」として老若
男女が古民家の雰囲気を楽しめる場所となっ
た。

「小川町は、山も畑も、自然も身近にありま
すから、自分らしい暮らし方を探せる場所
じゃないかと思うんです。小川には、まだ
まだたくさん空の家も残されている。

やしきぼっこのように人が集まる場所にす
ることも、「広い家で子育てをしたい」「生き
ものや作物を育ててみたい」という思いも叶
えることができるのでは、と岩田さんは言う。
「ここに住む人が自分なりの楽しみを見つけ
てくれるのは、私たちにとっても嬉しいこと
ですから」。

人の魅力にほれ込んで、 この場所を作った

高田信夫さん◆出版社高穂社代表取締役



都内で出版業を営む高田さんが小川を訪
れるようになったのは、銀座の屋上で養蜂
をする「銀座ミツバチプロジェクト」に参
加したことがきっかけで、「ニホンミツバ
チを飼育する場所」を探し始めたからだとい
う。都心からも、自宅がある大宮からも
1時間と少し。有機農業が盛んで、自然も
豊かな小川町のことを知り、通うようにな
った。

「環境がいいだけでなく、面白い人が多
い場所だと思ったんです。カフェ兼ギャラ
リーの『たまりんど』に集う人たちが、里
山の保全を目指す『里山クラブ』の人たち
——そして移住サポートセンターを通じて
岩田さんに家を見せていただいた。衝動的
に借りてしまいました。話すとみんな来た
がるものだから、後に引けなくなっちゃっ
て(笑)」。

借りた家を、小川町に来てみたいと思う
人や、小川町に住む面白い人々がつながる
「ハブ」にしたいと考え、仲間の力を借り
ながらリノベーションを進めた。

まずは食にまつわるイベントを考えて
いたので、セントラルキッチンがプロ仕様
の本格的なもの。とはいえず、すべてが新品
というわけではなく、閉店したレストラン
から机や椅子を譲り受けたり、不要な椅子
や布団をもらったり、高田さんの人脈と工
夫の賜物も随所に見られる。「自分たちで
修繕できるところはして、抑えるところは
抑えています」。

この家には「座敷ぼっこ(さしきわら
し)」が現れたことがある、という話からや
しきぼっこ」と名付けられたこのスペース
では料理教室、コンサート、映画上映、勉
強会、ワークショップなど、多岐に渡るイ
ベントを行ったり、「ぼっこ会」と呼ばれ
る町おこしセミナーを定例で開催したりと、
オープンしてから高田さんは目の回るよ
うな忙しい日々を過ごしている。

「人にとんとん声をかけちゃうものだけ
ら、ついやるが増えちゃう(笑)。ゆ
くゆくは宿泊もできるようにして農家民泊
もできればと思っています。最初の目的だっ
たニホンミツバチの養蜂も始めたいしね」。

「ここは私の生家でした」。ちょうど小林さんが立っている駐車場の辺りに店舗兼住宅があった。小林さんは昭和27年に生まれ、祖母、両親、姉、弟の6人家族の長男としてここで育った。

今では取り壊してしまった家の懐かしい情景を、小林さんは生き生きと語る。「親父が雑貨商をやってましてね。お菓子や文房具、日用雑貨、いろいろ売ってましたよ」。正月の餅つきの時、餅が手や板につかないようにふる「餅とり粉」や、お葬式のお返しとして弔問客に配った砂糖なども取り扱っていた。「注文が入ると「子どもたちも手伝って！」なんて親父に言われてね。手を真っ白にしながらスプーンで小袋に詰め替える作業を手伝いましたよ」。

「田中君が住んでいるのは、私が結婚する時に裏に建てた家です。店は親父が亡くなった後、お袋が細々と続けていましたが、20年ほど前にたんで取り壊しました。裏の家はまだ新しかったので貸すことにしました」。小林さんは地域の付き合いをきちんとこなす田中さんの人柄を高く評価する。「彼は隣組に入って、地域とつながりを持ってくれている。単身で住んだ人では初めてじゃないかな」。

田中さんが家の外で収穫した野菜を売りながらギターを弾いているのを偶然見かけたことがある。「面白いなあと思って。田中君はかわいいやね」。

田中さんの経営するバーへ出かけてみた時、カラオケ代わりにギターで生伴奏をしてくれたと話す。「テンポを私に合わせてくれるからカラオケより良い。歌詞はスマホで検索して、画面を見ながら歌うんですよ。彼は大したもんです」。

「おぎょう」と親しまれた祇園祭りに七夕祭り、小川の二大夏祭りの喧嘩は、今でも記憶の中に鮮やかに蘇る。町にかつての喧嘩はないが、小林さんは住む人それぞれの「幸福度」というキーワードを挙げた。「小川の良さを分る人が住んでくれて、風土とか町の色合いを感じて幸せと思うのなら、それが一番ではないでしょうか」。

農業をしながら、自分のやりたいこともやって生計を立てる。そんな生き方を「半農半X」と呼ぶが、田中さんの仕事をそこに当てはめれば「半農半店主」だろうか。平日は有機農家として畑に向き合い、週末はカフェ&バーのマスターとしてスマートな立ち振る舞いで客をもてなす。

二十歳の時にインドを訪れたことが、有機農法の盛んな小川への移住を考えるきっかけとなった。町内の農家で住み込み研修生として学び、就農。腰越地区の広い一軒家を借りたのは、農業資材を置くスペースが必要だから。2階に8畳3部屋と台所があり、暮らしの中心が上階になる造りだ。住み始めてもう8年になる。

「古さは全く気にならない」と話す田中さんは、築40年近い家をうまく住みこなしてきた。2階に紐をとりつけ、階下に降りずに朝刊を受け取る装置を自作したり、外付けの水栓には水受けをつけ、使いやすくしたりした。大家の小林さんは、田中さんの創意工夫を微笑ましく見守る。「今の人にはちょっと使い勝手が悪いところもあると思うんだけど、田中君はいろいろと工夫している」。

堅実な生活スタイルは、農業で体得したと話す。「農作業中に機械の調子が悪くなることはよくあるけど、その都度買い替えていたらキリがない。農家の人はみんな自分で修理している。僕も仕組みを理解して自分で何とかしようと考え癖がつきました」。

昨年3月にオープンした店の名前はトランジット。同名の旅行誌もある通り、田中さんは旅好きだ。アジア旅行や農業を通して気づかされたのは、考え次第で自分でできることは意外に多い、ということ。最近、素焼きのレンガで自ら家を建てたと話すタイ人に出会い、家に対する価値観を大きく揺さぶられた。そうか、「人生最大の買い物」なんて言われるマイホームだって、いくらでもカスタマイズできるはずと、目下「自分で家を建てる」という壮大な構想を温めているとこだ。

なるべくお金に頼らず、自分らしく

田中慎太郎さん◆農家のカフェ&バー トランジット

農家のカフェ&バー トランジット…オーガニックの地酒、地ビール、地ワインが楽しめるカフェ&バー。移住者と地元の人々との交流の場にもなっている。
<http://ogawa.transit.saitama.jp/>

住む人それぞれが幸せであれば

小林和夫さん◆小川町教育委員会教育長

小川で、
自分らしく
働く



暮らしと労働は
地続きだ

ハッタケンタローさん
イベントプロデューサー&デザイナー

里山や古い街並みを舞台に、個性豊かな
町民がつむぐ「物語」のある町

休日は都会と
距離を置いて

脇元寛之さん
株式会社SGN 代表取締役

1時間半という都会との適度な距離が
仕事と休息のメリハリを作ってくれる

「東京朝市アースデイマーケット」と土と平和の祭典」など、有機農家と都市の人々を結ぶ農業イベントの仕掛け人兼デザイナーとして欠かせないのがこの人だ。プロデューサーとして全体を取り仕切る一方、リーフレット制作など細かなデザインワークもさくさくこなす。ハッタさんは、異色な人材だ。現在のワークスタイルからは意外に感じるが、前職は商社の営業マンだった。効率良く仕事をこなし、営業成績は良かったが、汗を流す労働の幸福感（一杯のビールのおいしさ）は味わえなかったという。『仕事』と『働く』は全く違うと気づかされた会社員時代だった、と振り返る。

インターネットの普及で、会社に縛られる時代でもなくなったことを感じ、退職。2001年、カルチャー誌を通して、興味を寄せていた渋谷の地域通貨プロジェクトに参加後、徐々にイベ

新宿・高田馬場でシステム開発会社を経営する脇元さんは、いろいろな顔の持ち主だ。「趣味半分」と語るが、Twitterに似た新しいSNS、マストドン運営者としての顔。アクセスのアクティブ度合いが国内で5本の指に入る音声合成ソフト「ボロカロイド」のコミュニティを管理し、自らもクリエイターとして参加している。小川町とつながったのは、サイクリストとしての顔だ。ロードバイク愛好者は週末山へ走りに行くが、小川町は秩父を目指す時、仲間と落ち合うのに皆が利用する玄関口なのだそう。脇元さんは何度も小川町を訪れるうちに農業にも関心が向いた。6年前に畑を借り、少し経つと駅近くにマンションを借りた。

小川町のマンションは、家賃が新宿の3分の1なのに部屋はずっと広かった。程なくして荷物も全部運び込んだ。新居・高田馬場でシステム開発会社を経営する脇元さんは、いろいろな顔の持ち主だ。「趣味半分」と語るが、Twitterに似た新しいSNS、マストドン運営者としての顔。アクセスのアクティブ度合いが国内で5本の指に入る音声合成ソフト「ボロカロイド」のコミュニティを管理し、自らもクリエイターとして参加している。小川町とつながったのは、サイクリストとしての顔だ。ロードバイク愛好者は週末山へ走りに行くが、小川町は秩父を目指す時、仲間と落ち合うのに皆が利用する玄関口なのだそう。脇元さんは何度も小川町を訪れるうちに農業にも関心が向いた。6年前に畑を借り、少し経つと駅近くにマンションを借りた。

「たまたま有機農業と出会ったんです。人との出会いと同じですね。有機が初恋の人」と笑うのは、霜里農場の金子宗郎さん。有機農業に携わって18年という金子さんは、フィリピンのネグロス島でNGOスタッフとして有機自給農場の立ち上げに10年以上関わったあと、霜里農場へ。小川町にきて10年ほどになる。霜里農場は、有機農業の草分け的存在、金子美登さんの農場で、40年以上、小川町の有機農業を育て、牽引してきた。田畑3ヘクタール、山林3ヘクタールを有し、牛4頭、鶏150羽を飼育。徹底した有機農業を実践しつつ、肥料やエネルギーの自給にも取り組んでいる。落ち葉や米ぬかを堆肥に、鶏のフンや牛のフンは肥料に、というだけでなく、家畜の糞尿や食物残渣を利用したバイオガスプラントでは、ガスと液体肥料ができる。太陽光パネルは家屋やアイガモ農法の獣害防止柵、井戸揚水ポンプなどに利用。地域の廃油はトラクターなどの農機具や車両の燃料として活用している。農場では、農業や化学肥料に頼らないだけでなく、電気や石油などにもできるだけ頼らない、持続可能なエネルギーの循環を目指しているのだ。



有機農業を、
あたり前のもの
にしつたい

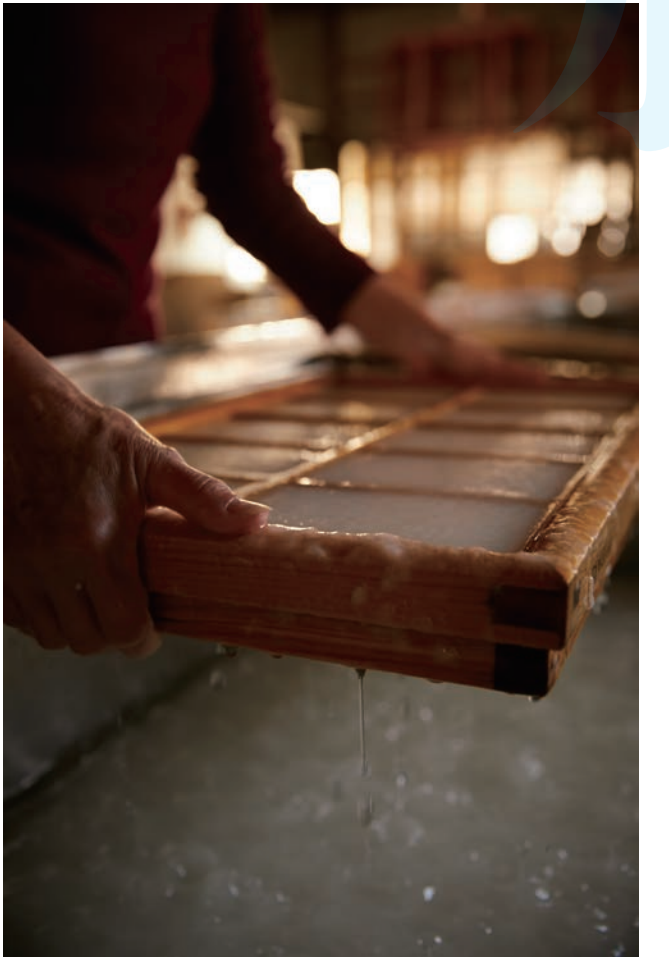
金子宗郎さん◆霜里農場

機に里になった。2010年、農林水産省「村づくり部門」で天皇杯を受賞。2014年には天皇皇后両陛下が下里地区を視察に訪れた。また、2014年から毎年開催されている「小川オーガニックフェス」は、県内、県外から来場する多数のオーガニックファンでにぎわう。

霜里農場では、1979年から農業研修生の受け入れをスタート。これまでに130人以上を輩出し、北海道から沖縄まで、全国各地で有機農業者として就業している。小川町では霜里農場以外にも、複数の有機農家が研修生の受け入れを実施。行政による就職サポート「農業次世代人材投資資金（旧青年就農給付金）」や農家同士のネットワークも充実している。畑の指導つき貸し農園もある。小川町には、移住を機に家庭菜園をはじめたいと思っている人から、有機農家で農業研修をしたい人、本格的に新規就農したいという人まで、多様なサポート体制が整っているといっている。



※「有機農業の地域的展開に関する実証的研究」埼玉県比企郡小川町を事例として（小口広太、2016）より



小川和紙

小川町の中心部を流れる槻川は、住む人、訪れる人の憩いの場となっています。この豊かな水が小川町といえは「和紙」といわれる紙漉きを育てました。何よりも豊富な水は楮の加工から紙漉きまで、和紙作りには欠かせないものでした。

およそ1300年前に紙漉き技術が伝えられると、和紙作りに適した土地であったこと、江戸の町へも近いという地理的条件のために小川和紙は地場産業として大きく発展しました。江戸時代は750戸、大正期には1000戸にも及ぶ農家が紙漉きに従事し、庶民の生活必需品となった和紙の需要に応じてきました。戦後の高度経済成長によって和紙の需要は減少しましたが、現在は伝統産業として小川和紙を守る職人

が活躍し、町をあげて後継者の育成にも力を入れています。

小川の和紙の中でも、国産楮のみを使った細川紙は、強靱で美しい光沢を持つ上質な和紙です。昔ながらの手作業で、熟練の職人によって「流し漉き」で作られ続けている細川紙の技術が、2014（平成26）年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

素朴な手触りの細川紙は、丈夫で保存性も高く、実に1000年以上の使用に耐えるといわれています。書道用の半紙や版画紙、障子紙や掛軸の裏紙はもちろん、和傘、ちょうちん、紙の器などの生活用品にまで幅広く使われています。

細川紙は薬品による漂白を行わないため、できあがりには自然な楮の色合いです。普通の和紙が光にさらされることで、だんだんと黄ばんでしまうのとは逆に時間が経つにつれて白さを増していくのも魅力です。

【和紙漉き体験のお問合せ】
埼玉県小川町役場 にごわい創出課
電話：0493-72-1221（内線 233）
ファクス：0493-74-2920

小川町を知るキーワード

インタビューに登場した人・物・場所や、小川町のお薦めスポット、イベントなどをキーワードでご紹介します。小川町に遊びに来るときの参考にしてください！

1. 金子美登

70年代から「日本の未来に貢献する」という信念を持って小川町で有機農業に取り組んできたパイオニア的存在。循環型農業の理想形を実践しながら、地元の豆腐店や酒造とタッグを組んで加工品を生み出すなど、有機をきっかけとした地域活性にも貢献。霜里農場で100人を超える研修生を輩出するなど「有機農業の小川町」の流れを生み出す、その源流となった人物。

2. 自然派の地ビール&地ワイン

「畑からのビール造り」をモットーに自給自足100%ビールに挑戦する「麦雑穀工房 マイクロブルワリー」は、遠方から訪れる人も多い人気店。完全無農薬のぶどうを使った自然派ワインが魅力の「武蔵ワイナリー」では、全国から選りすぐりのこだわりワインが楽しめる「小川のワイン祭」を毎年4月のG.W.前半に開催するなど、小川町では日本酒以外にもお酒の楽しみ方がいっぱいです。

3. はじめる自給！ 地ビールチャレンジ

ビールの原料となる有機大麦を自分たちの手で蒔いて、育てて、収穫するまでを体験できるイベント。「ビールが好き！」という思いが集まったさまざまな人たちが、国産自給率100%を目指すビールづくりを通して交流しています。

4. Ogawa Organic Fes (小川町オーガニックフェス)

有機の里・小川町で催されている、食はもちろん、トークイベントやワークショップを通して、五感でオーガニックを感じることができる野外フェスです。MINMI、Yaeなどのアーティストによるアコースティックライブもあり、緑に囲まれた山の中の会場には昨年6000人以上の人が集まる盛況ぶりでした。

5.NPO法人 霜里学校

赤い屋根が可愛らしい旧下里分校の校舎を利用した、地域の内外の人たちの交流拠点。初心者から有機農業の技と思いを学べる「有機野菜塾」、お花見や出店で賑わう「さくら祭り」、耕作放棄地を活用したお米作り体験「マイ米田んぼ」などのイベントが毎年行われています。

6. 山に囲まれた町

なだらかな低山に囲まれた小川町では、日常の暮らしが山とともにあります。一部の保育園のお散歩コースにも登山が組み込まれることもあり、子供たちも自然と山歩きを覚えて、強い身体を育てていきます。「ちょっとそこまで」の気分が登山ができるのも、小川暮らしならではの楽しみ。

7. サイクリスト

周囲の山々のおかげで適度なアップダウンがあり、豊かな自然が目を楽しませてくれるとあって、小川町を含む比企地域は関東屈指の人気サイクリングコースがたくさんあります。かつては自転車の国体のコースにもなったほどで、バイクラックなどの設備面も充実。サイクリストじゃなくても、レンタル自転車でサイクリングが楽しめます。

8. 外秩父七峰縦走ハイキング大会

毎年春に行われる、東武鉄道主催のハイキング大会。山々に囲まれた地形だからこそできる長距離縦走を楽しみに、多くの老若男女が小川町を訪れます。

9. 小川和紙マラソン

2017年で25年目を迎えた、小川町を一周するマラソン大会。街並みと自然を楽しむに毎年約4500人が参加。多彩な地元グルメがお店されているのも魅力です。

10. 小川町七夕まつり

7月末の土日に開催される七夕まつりに集う人々の数は、約20万人。この2日間は、小川町に最も人が集まる日でもあります。約1800発が打ち上げられる花火や、小川和紙をふんだんに使った竹飾り、行燈などが町を彩ります。京都にらって開催されていた祇園祭（愛称はおぎょん）と1970年に統合されたこともあり、屋台の引きまわしなどの伝統的な出し物も。

11. 花和楽の湯

手ぶらで日帰り温泉も、ゆったり宿泊もできる温泉施設。きれいで広々とした館内には露天風呂、岩盤浴、サウナ、足湯と充実の設備が。お食事処では地元産の食材を使った料理や、地酒が味わえます。

12. 太田ホルモン

小川町駅近で比企地域のソウルフードである「やきとり」（豚肉のカシラ肉を焼いたもの）が食べられる、創業50年以上の老舗ホルモン店。名物の辛味噌ダレの味わいは、お酒がすすむこと間違いなし。

13. 自治の気概

かつては商人の町として栄えた小川町には、自らの手で物事を変化させていく「自治の気概」があります。個人商店から日本を代表する一部上場企業へと成長した「しまむら」「ヤオコー」も、この小川町の気風から生まれました。

14. コミュニティスペース「たまりんど」

NPO法人小川町創り文化プロジェクト（まちぶん）の拠点でもあるギャラリー&カフェ。明治時代に建てられた長屋を活用した落ち着いた店内には、ゆったりとした時間が流れます。地元の工房産の焼き物などの素朴な工芸品、どこか土の香りがするアート作品を眺めながらのカフェタイムに、思わず時間を忘れてしまいそう。ワークショップなど貸しスペースとしても利用可能。

15. 和紙体験学習センター

1936年に建てられた和紙の埼玉県製紙試験場。趣のある昭和レトロモダンな建築が楽しめるとともに、製紙に使われていた機械が間近で見られるのも魅力です。現在は手漉き体験のほか、和紙の作品展示も行っています。

小川町に関するお問い合わせ

小川町の観光情報や移住情報などを知りたい方は以下までお気軽にアクセスしてください。

☐小川町役場



☐小川町観光協会



☐小川町移住サポートセンター



秩父の山々でろ過された地下水。これを源流に持つ槻川、兜川といった清流が、小川の伝統産業を支えています。

【酒蔵見学などについてのお問合せ】
晴雲酒造 TEL 0493-72-0055
松岡醸造 TEL 0493-72-1234
武蔵鶴酒造 TEL 0493-72-1634



同じく秩父山系の清流が造り出した名産が「地酒」。美しい水、酒造りに適した気候の小川には、多くの造り酒屋が存在しました。その隆盛は神戸の酒どころ「灘」になぞらえ、「関東灘」の別名で呼ばれるほど。それほどまでに酒造りが盛んだった理由のもうひとつには、商人の町として多くの人が訪れていたことが挙げられます。和紙産業を中心に栄え、多くの人が行きかうようになると飲食産業の需要も高まっていきます。今も残る料亭や旅館の立派な店構えに、往時の繁栄をしのぶことができます。酒造りは中でも特に人気で、現在も町には3軒の造り酒屋があり、伝統の酒造りを行っています。

芳醇な味わいの酒が特徴で1819（文政2）年ともしっかり歴史の長い「武蔵鶴酒蔵」、米や和紙

などの地産地消にも力を入れている「晴雲酒蔵」、全国的にも高い評価を得る「帝松」に代表される「松岡醸造」。それぞれの酒蔵が腕を競い合い、特色のある銘酒を生み出しています。「道の駅おがまち」など、小川町内のさまざまな店舗で各酒蔵の日本酒を購入することもできますが、お酒好きなら各酒蔵をめぐってみるのもおすすめ。各酒蔵に残る白壁の蔵や煉瓦の煙突など、「武蔵の小京都」らしい歴史のある佇まいを楽しめると同時に、酒蔵に併設されているショップでは、お酒以外にも酒粕やスイーツ、漬物などのオリジナル商品が購入できます。ぜひ足を運んでお気に入りを見つけてみてください。さらに深く酒造りを知りたい人のために、各酒蔵では見学（要予約）も行っています。

■小川町のこと

埼玉県のほぼ中央部に位置する小川町。「絹の道」と呼ばれた八王子道と秩父往還などの街道が交わり、人も物も集まる宿場町として栄えました。槻川の清流に支えられた和紙づくりと酒造、そして建具と鬼瓦、裏絹などの産業によって発展し、現在では有機農業の取り組みでも広く知られています。また地域のクラフトビールと、地元産のぶどうを使ったワイン、そしてモノだけではなく、「これからの豊かな暮らし」を考える人々が小川町には少しずつ、でも確実に増えてきているのです。緑豊かな里山に囲まれた土地であると同時に、新しいものを生み出す力を秘めた場所を、ぜひ訪れてみてください。

「山の町、紙の町、酒の町」である小川町は、地盤が固いために地震の際に揺れにくく、液状化が起きにくいのも特徴です。1955（昭和30）年に小川町・大河村・竹沢村・八和田村が合併し、翌年大里郡寄居町の西古里地区と鷹巣地区のそれぞれ一部が加わって、現在の小川町となりました。現在は小川地区、大河地区、竹沢地区、八和田地区と4つの地域に分かれており、それぞれの地域に風土や歴史による特徴があります。

■小川地区

中心市街地を形成する「小川町駅」前は、江戸時代に作られた街です。国道254号はかつて六斎市（室町～江戸時代に開かれた定期市）が立ち、隆盛を極めました。和紙などの伝統産業を支えた槻川の流ればまさに小川町の象徴。南東部にある下里エリアは、世界的にも有名な「有機農業」の里になっています。

■大河地区

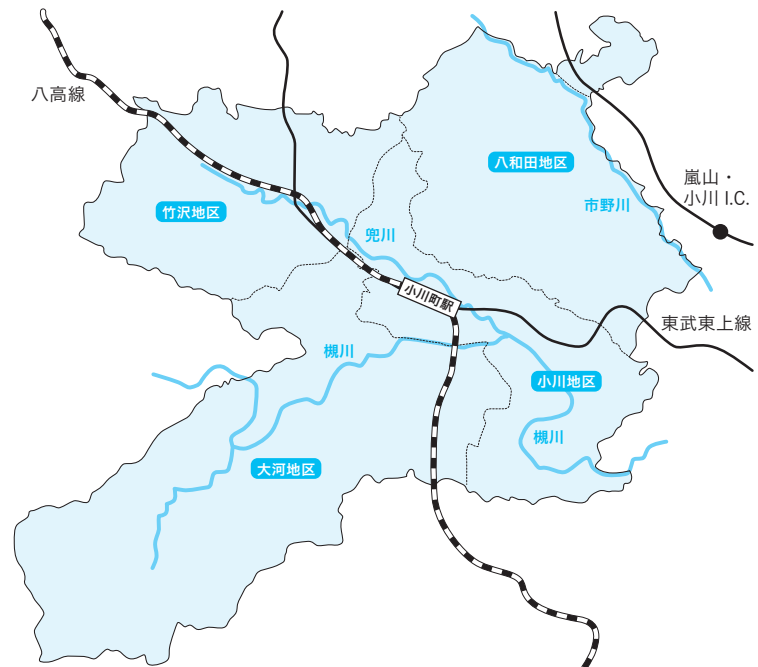
南西にあたる笠山から豊かな森林が配され、林業がとて発達した地域です。北東方向に派生する平地部分には小川の伝統産業を支えた木工所が数多くあります。川沿いに造り酒屋も1軒あり、総合福祉センターや栃本親水公園があるなど、癒しの空間が広がっています。

■竹沢地区

東武東上線の「東武竹沢駅」とJR八高線の「竹沢駅」の2駅を配する竹沢地区は、官ノ倉山や石尊山などでハイキングが楽しめます。発達した谷津田（谷地にある田んぼ）に集落があったり、国の指定重要文化財・吉田家住宅がある一方、ホンダのエンジン工場があるなど、バラエティに富んだ地域です。

■八和田地区

田園が広がる八和田地区は、農地が占める面積が多く、集落と里山の自然とが共生しています。旧鎌倉街道が地域の市ノ川沿いに走り、宿場として栄えた奈良梨や四津山城跡など中世の面影が残る、小川町でも最も古くに栄えた地域です。関越自動車道の「嵐山小川IC」もあり、車でのアクセスが便利です。



■データ

[面積] 60.36km²（うち林野面積 33.07km²）

[人口] 30,532人

[世帯数] 12,986世帯

（平成30年2月28日現在）

■アクセス

[電車] 池袋駅から東武東上線急行で小川町駅まで約1時間10分

[車] 関越自動車道 嵐山・小川IC下りる

小川町移住サポートセンターは顔が見える関係を大切にしていきたいと考えています。

ぜひ窓口へお越しいただき、ご希望などお聞かせください。

■小川町移住サポートセンター（運営：NPO法人霜里学校）

TEL 0493-74-1515（観光案内所「楽市おがわ」共通）

e-mail info@ogawa-iju.jp

〒355-0328 埼玉県比企郡小川町大字大塚47番地3 2階

開館時間 火～日 9:30～17:00 定休日 = 月

HP <http://ogawa-iju.jp>

Facebook <https://www.facebook.com/ogawa.iju/>

■協賛

移住サポートセンターの取り組みにご賛同いただき、以下の個人・企業の皆さまにご協賛いただきました。

川野 幸夫 株式会社 CWM 総合経営研究所 株式会社大塚紙店 株式会社ネクサス
尾島 満矢 一般社団法人 the Organic 長倉 正昭 株式会社ミララ 役場のとなりのバル。
正喜バル 武蔵鶴酒造株式会社 門倉和紙店 伊藤 貴久 有限会社クリナス
有限会社大塚商会 松岡醸造株式会社 五十嵐 康博 晴雲酒造株式会社
サラダ館小川町駅前店 安藤 和広 八田 さと子 田中 栄子 谷口 西欧
小原 壮太郎 大和田 順子 高橋 美江 平山 友子 長谷川 欣則 西田 双太
株式会社佐山商店 水谷 伸二 矢ヶ部 慎一 江田 佳那子 Ogawa Unity

■取材協力

本冊子制作にあたって企画段階から取材まで、以下の学校・個人・団体の皆さまにご協力いただきました。

小川高校放送部

谷野 浩人(顧問) 荻久保 美咲 野口 理美 安達 湖瑠 加賀谷 百世

安藤 真穂 小村 真衣 水野 香織 久保田 真央 清水 結生

長田 夢花 齊藤 あい 松本 哲平 坂本 健登 服部 涼平

小川保育園 川越観光自動車株式会社

武蔵鶴酒造株式会社 和紙工房うちむら

高橋 優子 (NPO法人生活工房つばさ・游)

平山 友子 (たまりんど) 毛利 公昭

■営業協力

立教大学コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科
空閑 厚樹(教授) 鎗田 裕理奈 津田 萌香 中村 理恵
岡田 梨花 高橋 馨子

■STAFF

Producer 谷口 西欧

Editor 田尻 彩子

Writer 岩井 光子

Writer 小沢 映子

Copywriter 蓑田 雅之

Art Director 三村 漢 (niwa no niwa)

Photographer 公文 健太郎

■発行

小川町移住サポートセンター（平成30年3月発行）

■印刷所

株式会社東京印書館

■小川町移住サポートセンター

安藤 和広

八田 さと子

田中 栄子

谷口 西欧